

『教室の窓』 一九五八年十一月（東京書籍）

視聴覚教育の本質

国立教育研究所
教育内容第二研究室長

矢口 新



視聴覚教育という言葉が使われ出したのは近々十年ぐらいのことである。それまではそういう教育は、映画教育や放送教育という言葉でよばれた。幻燈教育などという言葉もあった。今は便利な言葉ができたから、視聴覚という言葉で何もかも一切合切ひっくるめてよんでいる。ところで映画教育とか放送教育とかという言葉は、実際にはどういう教育をさしているかというところ、映画を見せること、放送を聞かせることといった程度のこと、最初の出發であったと言つてよい。これは映画教育や放送教育のはじまりのところ、今から三十年ぐらい前のことを見ればわかるのである。

端的に言えば、映画教育は、一般の興行映画の流す害毒に対抗して、教育的に映画を見せようというところからはじまったのである。放送教育も多少条件はちがうが、子供にもよい放送を聞かせようというところからはじまったものと言つてよい。こういうふん囲気は、視聴覚教育という言葉が使われるようになった現在でも、つよく残っている。子供によい映画を、よい放送をとという考え方をする視聴覚教育である。

これは考えようによつては、今まで行われてきた教育のわくの外の問題である。たとえば、学校教育というのは、一定の形をとつて行われてきている。そこでは、教科を設けて子供を教育している。そこにはさまざまな問題がある。子供をいかに指導するか、いかなる教材を使用するか等々である。しかし、そういう問題とは別に、映画とか放送とかが社会的環境として生まれてきて、それに子供が影響されるようになった。そういう問題を処理する方策として映画教育とか放送教育とかが言われ出したのである。いわば環境の問題である。

現在はテレビも普及してきたし、興行映画もますます競争がはげしくなつてきているので、そういう点から、子供の環境は必ずしも一般の親が望むように平穩でなくなつてきている。先年も太陽族映画の問題があつたが、その後といえども決して跡をたつていないわけではない。視聴覚教育が行われているというように感ずる人は多いのである。子供によいものを見せて、それに対抗しようとする運動もだんだん活発になつてきている。これが視聴覚教育に対する視聴覚教育といつてよいであろう。一種の環境浄化運動でもあるが、これには学校も大いにのり出してやる価値のある仕事というので、学校が積極的に子供によい映画を見せる運動を展開しているところも多い。映画館におけるモーニングショーを行つたり、学校の講堂でよい映画を見せることをやつたりしている。映画教育などというのはこれであろう。

二

視聴覚教育という言葉でよばれる教育活動では、今まで述べたのと全くダイメンションが異なつたところのものがある。それは、教育が行われている学校というわくの中の問題で、教材の問題を考える立場である。つまり、学習指導や教育課程の中で、視聴覚教材を利用しようという考え方からの視聴覚教育である。これは教材の問題であるか

ら、必然的にそれぞれの教科の問題である。各教科はそれぞれ異なった目的をもっているから、従ってそこで使われる教材も種々異なるわけである。同じく教科書によって提出されている教材でも、国語のそれと、社会科学や理科のそれは、教材としての意味、それに対する子供の対し方が全く異なると言ってもよいのである。それぞれの教科はそれぞれの意味で視聴覚教材というものを必要としてくるが、その意味は教科によって全くおなじではない。それを視聴覚教育というような言葉で一括して考えていては、ほんとうに教材問題を考えていることにならないのである。ところが、視聴覚教材と言われるものは、教材を提出する方式の上からの形式的なよび方なのである。つまり映画とか放送とかテレビとか、教材提出の方式によって一括して、まとめて視聴覚教材とよんでいるのである。そこには教材提出の方式として共通したものもあるが、全く異なったものもある。同じく視聴覚教材と言っても、放送という形式で提出された教材と、映画の方式で提出された教材とは相当にちがったものである。これを一括して視聴覚教材とよんでいるのは、教材を考える立場からすると、あまり意味のあることでない。

視聴覚教育の理論などといって、こういう性格のちがった教材を一括して、その効果がどうかというようなことが論ぜられているけれども、そんな一般論では、あまり実際の教育には役立たないのである。さらに教材の側からのみでなく、教科の側から、いつ、どこで、どのように使う教材かと考えてこなくては、教材の問題とはならないのである。そういうことを考えて、はじめて、どういう内容・性格の教材が必要かときめることができ、そこで教材の効果も問題にすることができるのである。これまでの視聴覚教育論は、こういうような問題のされ方が少ないのであって、一般論として、視聴覚教材を利用すると学習に効果ありなどといった程度のことしか問題にされていない。き

わめて初歩的、原始的な段階にあるといふべきであろう。

こういうふうになると、視聴覚教育論などというのは、各教科の教材論の中に解消してしまうのがよいのである。各教科が必要な教材をどう提出するかという場合に、伝統的な教材観に立たないで、あらゆる方式で提出された教材を利用するという考え方があればよいのである。ところが、一般の教師にはそういう考え方が少ない。残念ながら、依然として教科書によって提出された教材を唯一のたよりにしている。そこで、主として言葉によって提出された教材をだいにしして、それ以上に一歩もぬけられないでいる。映画というような手法を使って教材を提出したら、非常な効果があるというように考えることができない。あるいは、観念の上ではわかつていても、実際にそういうことをやらないのである。古い教育の惰性の強さをしみじみ考えさせられる。

三

さて視聴覚教育という言葉で、子供によい映画を見せようとか、よい放送を聞かせようということの意味するものは一応除いて、私は教材の問題として論じていくことにする。ところで、教材と言っても、あらゆる教科に通ずるような話では実はあまり意味はないのである。視聴覚教材ということが今のところ問題になってよいのは、私は社会科学と理科だと思っている。他の教科でも、こういうものを利用する場面がないことはないが、まあ、あまり重要な意味はもたない。否、かえってそういうことを言うために、教科の本質を忘れることがあるのである。たとえば、国語の教育で視聴覚教材を用いるなどということが言われる。そういうことがないとは言わないが言葉の教育をするのに映画を見せて、とくとくとしているといったピントはずれの授業を見ることもある。

それはともかく、社会科と理科が視覚教材をもっと利用するようにならないといけない理由を次に述べよう。といっても、実は、そうむつかしいことではない。簡単なことなのである。自然の学習にしても社会の学習にしても、その学習は具体の事実を材料にしていくことである。自然がわかるとか、社会がわかるといことは、自然や社会の中にはいりこんで、それを自分の頭で整理していくことができるということである。自然、社会そのものにぶつかって、自分で整理、分析してみることができるところである。だから、自然や社会の事実を直接ぶつかることなくしては、自然の学習とか、社会の学習とかは成り立たないのである。

自然科学や社会科学を研究するということは、自然や社会をいじくりまわすということだといってもよい。妙な言い方だが、子供がおもちゃをいじくりまわすように、自然や社会の現象をいじくりまわすことなのである。子供がおもちゃをいじくりまわすことによって、たとえば、むつかしい電機的なおもちゃでも自由にこなせるようになる。はじめて見たり、ふれたりする子供は、たとい理くつはわかっていてもおつかない、つくりで、自由自在にあやつることはできない。それとおなじように、自然や社会についても、ただその理くつを聞いた、概念的に法則というものを知っているだけでは、自然の世界の中でも、社会の中でも、それを自由自在に解釈するなどということはできないのである。

自然や社会をいじくりまわすということを、実証的に勉強するといふように言ってもよい。この実証的な学習のさせ方というものが、現在の日本では最も欠けているものである。言葉で説明したらわかると思っている。言葉で説明してわかるといふわかり方と、実証的にわかるといふことは全然別なことである。たとえば、空気の組成を知っているといっても、概念的に知っているだけなら、それはただそれだけであって、ほとんど意味がないのである。実際に分析してみたとい

うこと、分析できるということが自然を知っているといふことで、そういう知り方が働く知識である。次々へと、発展的に、ものを考える力となるのである。概念的におぼえているだけなら、やがて忘れるであろうし、おぼえていたとしても、死んでいるのである。

このことは社会に関しても同様である。たとえば、日本の工業には、さまざまなものがある、ということでも、言葉で機械工業、せんい工業などと教えることもできる。しかし、その実態を見ないで言葉だけを知っていると、それは何にもならない。実際にふれてみたということが、われわれの社会の工業についてわかっているということ、それをもとにして、ものを考えるといふ力となるのである。また、手工業と機械生産という言葉も、言葉だけならほとんど意味がない。いかに詳しく言葉を使おうとも、それは手の工業ということ以外には出ない。また、機械を使う生産ということ以外には出ない。それは手工業や機械工業について、何らの実態にふれていないから、それ以上、何を考えることもできない。教えられた言葉以外にちよつとでも出たら、もう自信をもってこうだということではできないであろう。否、教えられた言葉についても、実態にふれていなければ自信をもつことはできない。これでは工業についてあれこれと考えることはできないわけである。概念という死がいをいだいているようなものである。視聴覚教材を利用せよといふことの根拠は、基本的にはこういうことなのである。

社会や自然の実態にふれて、それを材料とするためには、あらゆる手段を講じて実態を押さえることをしなければならぬのである。根本的には社会にしても、自然にしても、そのもの自体を観察し、そのもの自体にふれることが理想的である。しかし、実際の教育活動にはさまざまな制約があつて、ある土地のある学校で、ある時に学習が行われるのである。すべて必要な自然や社会の事実を教材として利用する

ことができるようにはなっていない。そこで、それに近づくためのさまざまな方法を講ずるのである。そういう方法を講じたものとして、教科書も置かれてあるのである。しかし教科書以外にも、ある面ですぐれたものがある。それがいわゆる視聴覚教材と言われるものである。

四

視聴覚教材と一口に言うが、実は社会科や理科の教材として考えると、非常に異なった性格のものがある。たとえば、映画と放送とでは、提出された教材は全くちがう。ラジオで提出されたものは目に見えないものであつて、自然の事実を見せることを必要とする場合にあまり役に立たないものであることは言うまでもない。社会の事実も目に見ることが多いから、そういうものをラジオで提出しようとしてもできないのである。しかし、社会の事実には目に見ることばかりでなく、人の言うことの中にあらわれている見えない事実もある。これはよみとるのに相当高い見識を必要とするが、そういう現実もあるのである。たとえば、災害にあつた人の実感をこめた話といったものである。そういうものは声をきくこともまた一つの現実にあふれることになるのである。しかし、ラジオが教師のかわりに何かを解説しているというようなことなら、それは異なった教師が出てきて説明しているという程度にすぎない。ラジオの教師の方が、よりたくみな教師であるかもしれないが、しかし本質的に、リアルなものを出しているという点ではない。この辺のことを誤らないことが必要である。こう考えると、ラジオを通じていかなる教材が出されているかが問題なのであつて、ラジオという道具を使えばよいのではない。ラジオはラジオとしてなしうる現実教材を提出するところに、その意味がある。だから、ラジオを聞かせることが視聴覚教材を利用したことにならないという点も考えておくべきことである。

このように考えると、少し大ざっぱな言い方ではあるが、映画とか、幻燈とか、テレビとかは、社会や自然の学習に特に役立つ教材提出の道具であるということができよう。何よりも自然や社会の現実にあふれさせる点で強味をもっている。しかし、もちろんそれは現実そのものでなく、どれも現実の一部をカットしたものである。現実の一部を抜き出して、それをつなげて構成したものである。構成するには構成する人の考え方があつてのことであるから、その意味で構成した人の見た世界であると言える。このことは、教育上には一面において有利であり、一面において限界をもっている。有利というのは、現実そのものを見せるより、だれかが見た世界を整理してまとめてあるから、わかりやすいということである。しかし一面において、これは現実そのものではなく、ある人の見た世界であつて、自分で見たものではない。しかし、現実を見るということは実は、いつも何かの見方によつて見ているので、人の見た世界を見ることによつて、われわれは人の見た見方をも知るのである。このように、見方と、その見方によつて見られた世界とを見ることによつて、われわれは見方を具体的に身につけるのである。そうしてさまざま見方にふれることによつて、現実に対して見る眼ができるのである。そこに自然や社会を自信をもつて見ていく力ができるのである。そうして現実そのものに迫っていく見方も身につけていくのである。

広く一般的に視聴覚教育などということを言わないで、まず社会と自然との学習で、いかに自然や社会の中へはいらせるかということを考えるべきであつて、そうならなければ、現在の教育は進歩しない。科学技術教育などと言っても、その科学性が貧困なのである。そういう科学性を学習に与えることが先決問題であつて、それが、必然的に視聴覚教材を必要としてくるのである。現在はまだ形式としての視聴覚教育が多すぎるのである。

(日本映画教育協会評議員)